

ゴーンンの、変らぬ嘆きと言わねばなるまい。(以上、苦吟と象徴)

19 光を表わす言葉の使用頻度を、李賀と同時代の詩人の作品中に眺めて見ると、

作者	作品總字数	光の語 %	夜の光 %	昼の光 %
孟郊	三三〇四八	二七五	〇・八	六五
張籍	二一八八四	一五〇	〇・六	五六
柳宗元	一三二九二	九二	〇・六	三七
李賀	一五九九三	二二九	一四	七五

20 李賀が頻繁にその作品中に歌い込んだ光の語のうち七五%までは、温度を持たぬ冷えた夜の光であった。……誰よりも光を多く歌った李賀は、実は、誰よりも光を恐れて、夜の闇の中にお

いてのみ、その詩情をかき立てたのであった。彼は本質的に夜の詩人であった。

21 七五%を占める夜の光の中に、他の詩人達には、絶えて見出すことのできなかった特殊な光の語が、一種類含まれているということである。それは、鬼燈・漆炬・陰火などの語として歌われている所の「鬼火」である。……あらゆるものを、死を予想した滅亡の姿において把握し、つかの間も休止することなくにじり寄る、時間の白い纖維に育えた李賀の感覚の触手は、夜の闇の彼方に、幻覚のごとく燃え続ける鬼火の焰のつめたさに、遂に触れるのである。

22 夜の詩人としての、彼の作品の与える無気味に冷えた蒼白な印象を、最も感覚的に、その皮膚の上において、誰よりも敏感に感じ取ったのは、明の王文祿である。彼はその著「詩的において、いみじくも次のように評している。「李賀の詩句には、烟火の氣無し」(以上、夜の詩人)

23 輯愈を中心に集った一群の詩人達は、その環境もまろくであつたが、彼等は互に、かなり緊密な交遊關係によつて結ばれていた。……同じくこのサロンの仲間であつた筈の二人の詩人、孟郊と李賀との間には、交遊のあとを見ることができないのは不思議である。……その理由としては、一応、二つのことが考へられる。その一つは年令の相異であり、他の一つは、性格の相異ということである。

24 孟郊四十一才の時に李賀は生まれ、孟郊が没して三年後に、李賀も世を去つてゐる。……賀島は李賀より年長なること、僅か三才に過ぎない。……賀島の筆を鑑くと……孟郊に寄せた詩を二首数えることができるし、更に、孟郊の死んだ時……酸舌の生涯を閑ぢた老いたる詩壇の先輩に対して、深い同情を寄せてゐる。……このように、年令の差ということが、何等の障礙ともなり得ないことが知られる以上、焦點は当然……二人の詩人の性格的な面に向けかえられねばならない。

25 彼（孟郊）の作品に、極めて暗黒に感じられるものは、現世的な富貴への希求と、社会に対する不満の感情とである。それは寂寥に……軽薄な才子どもの横行する現代——への憤懣と呪いに変り、遂に、現実を離れた古來の世界に、彼の不満にみちた心は逃れてゆくのである。

26 孟郊の生涯を眺めてみて、極めて深く人の心を捉えるものは、彼の深い人間愛である。甚だ素朴に、朴訥に、彼は彼と交わる幾人かの人々を愛する。その数は、決して多くはなく、むしろ限られた少数の人達に過ぎなかつたが、彼は、その視野に映る少数の人々に対して、実に不器用に、しかし、まことに深く、その愛情をそ、いでゐる。

27 彼（孟郊）の詩は、非現世的性格が、現世の齒車の中に噴まれるその軋轢の苦悶の上に咲いた孤高の花であった。

28 彼（李賀）が王族の裔であつたということ……肺を病む宿命の病詩人であつたということ、このことが、彼の人生を悲劇的に構成し、彼の作品に、極めて鮮やかな影を落している。……その軽薄な言動は、時人の蜚笑を買う程であつたらしい。……オを恃んだ傲岸不遜の少年の姿は、躍如としてそこ（幽閑鼓吹の記事）に描められている。

29 李賀の詩集を繙く人は、彼に贈答詩が極めて少ないことに、先づ気がつくであらう。……李賀は、あまりに奔放に、その詩を歌つたから、ということがその第一であり、第二には……他人の思ひくなどに殆ど捉われることなく生きた李賀の態度が、考えられる。

30 孟郊の古典への意志は……現代の軽薄を逃れての、孤高な念慮がもたらした結果であつた。李賀のそれは……新奇な詩情と表現を求めての、古典への志向であつた。

31 韓愈と孟郊との交わりは……傷ついた孤高な孟郊の心と、それを包んだ韓愈の幅の広い人格との、温い融合であつた。一方、李賀と韓愈との交わりは……李賀の才気と、韓愈の才気との交わりであつたと言えるのではあるまいか。

32 人間完成の道を歩き続けた孟郊と、糾爛たる詞華をのみ求めて歩いた李賀という全く異質の二つの姿勢は、……一方は、言わば人生派的な傾向であり、他は、耽美派的な傾向であると言えよう。
(以上、李賀と孟郊)

33 本参を評する場合の奇と、李賀のそれとは、全くその質を異にしていると言わねばならぬ。

……李賀の場合には、内面へとひたすらに迫つていつた病的な追求が、遂に、次元を異にした「奇」なる表現手法の発見となつたのであつたが、岑参の場合には……新奇なるものを求めてやまぬ憧憬に満ちた健康な心が、その足をもつて進つた広大なる世界の縮写が、そのまま「奇」なる果実をもたらしたのであつた。

34 この論（洪亮吉、北江詩話）は、李賀の手によつて開拓された世界、つまり従来の常識的表現と、全く感覚の次元を異にした新奇なる表現、つまり「奇にして理に入らざる」所の表現の世界と、岑参によつてもたらされた世界、つまり用語は極めて日常語であるが、描かれた事物が地理的な距離を内包しているために生ずる新奇な驚き、との関係を論じているものである。

（以上、岑参の辺塞詩）

35 李賀の詩は、きわだつて鋭角的な美意識に支えられたものであり、中国の詩が一般に持つ常識性を拒否した所に成り立つ難解なものであつて、その一点に人々は古来常に魅せられるものを持ち続けて来たし、そのの解明に、人々は常に駢り立てられて今日に及んだのであるが、多くの研究者は（愛好者は）数篇の論文を残して、その糸壇の前をひとまづ立去ることがしばしばであつたように思われる。そして、それらはそれなりに、それぞれ李賀詩の本質を指摘していたと言えるのである。

36 李賀の世界は、遠くみながれた夢の世界であり、李賀がその堅い扉を開くのは、少年の、みづみづしい詩心に対してだけではないのか。しかし、その難解な詩の扉を開くためには、どうしても、人々は知識の木槌を手にせねばならぬ。これもまた容易なことではない。時は流れてゆく、

李賀のとりこになった少年が、鎖ついて開かぬ錠穴を見出して、木槌を求める赤に出た日から、時間け風のように流れ去る。或る少年は旅に出たまま遂に帰らなかつたし、或る少年は、再び帰つた自分が、もはや昔日の少年ではないことを嘆かねばならなかつた。

(以上、原田憲雄氏の李賀論文)

前の三論文に対して荒井健の書評がある。つづめていえば、次の二点になろう。

詩人李賀の、消極性のみが強調された。

かれの詩の本色である「硬性」、はがねのように強靱な生命力ともいうべきもの、が見忘れられた。

當っているだろう、そうして荒井が八はがねのように強靱な生命力ともいうべきものVといったものを、論理をもちや論理とは見分け難いまでに感性化する詩的変形力の強度、といいかえることができるかもしれぬ。この変形力にかかると八積極的V八健康的Vなものたちがまちその反対のものに転化する。上尾論文は、その機微をつかみ、宛大な資料を分析して、そのことを指摘しているのだが、各々の結論的な部分で、変形力の強度と変形対象のそれとを混同したような氣味があり、それが李賀詩への評価の消極化につながるのであるう。

結論的な部分だけ切りはなしてなうと、荒井・上尾両説は千里をへだてるように見えるかもしれないが、そこにいたるプロセスは相近く、数々の発見があり、八それそれ李賀詩の本質を指摘していたVといえる。

和 田 利 男

一九五六年七月『群馬大学紀要人文科学篇』第五卷第八号に和田利男「李賀の鬼詩とその形成」が掲載された。八李賀の詩が世に鬼詩と称せらるる所以を、素材と表現の両面から検討し、次いで或は奇詭と言われ、或は瑰詭と評せられる彼の特異な作風が、如何なる条件の下に形成されたかを考察したものである（はじめがき）。以下、要旨を抜き書きする。……李賀の鬼詩を云々するに先だつて、まず、鬼詩という語の意義内容を明確にする必要がある。

2 南宋嚴雨の語として…… 太白仙才、長吉鬼才、然仙詩鬼詩皆不堪多見、多見則仙亦使人不敬、鬼亦使人不驚、…… 文勢から察すると、「鬼詩」という語は、上の「長吉鬼才」を承けて、「鬼才之詩」というべきところを…… 「鬼詩」の二字に約めたものと見てよいと思う。同様に末

句の「鬼」も実は「鬼詩」の約言なのであり、更に還元すれば「鬼才之詩」なのである。…… 従つてこの…… 「鬼」は、「詩」を直接修飾するものではなくて、本来「才」にかゝるべき性質のものと考えなければならず、後世讀うところの鬼詩とは異なつた用法をしてゐることになる。

…… その特色は、読者に驚異の情を起さしむる点にあること、という程度に過ぎない。

3 具体的に例を挙げて、これが鬼詩であると説明したものは、管見に入つたところでは清の潘德輿の「養一齋詩話」だけである。彼も李賀の集中から次の諸句を引いて、「固鬼詩矣」と評している。(1) 漆炬迎新人（感風五首、其三）(2) 幽墻苔擾擾（感風五首、其三）(3) 石馬臥新墀（追和

何謝銅雀妓(4)陵樹風自起(追和何謝銅雀妓)(5)夜風吹馬馬踏雲(神絃曲)(6)銅鏡空(神絃曲)(7)秋墳鬼唱鮑家詩(秋來)(8)嗷嗷鬼母秋郊哭(春坊正字劍子歌)(9)彭祖巫咸幾回死(浩歌)(10)酒不到……以上の例句に拠つて一応鬼詩の性格を歸納してみると

一、人の死、または死者の靈魂を素材としたもの。

二、俗神上の神を素材としたもの。

と考えることができる。いずれも暗く無氣味な、いわゆる鬼氣を感じしむるものである。たゞし、潘德輿の例示したものは断句であつて、全詩でないところを見ると、必ずしもそれが一篇の主題である必要はなく、そのような句を含むものであれば、これを鬼詩と称したものだといふことが察せられる。……然し……「養一齋詩話」も……体系的、組織的でない憾みがある。

4. そこで試みに亭贊の集中から、鬼字を用いた句を抄出して、それがどのような意味を持つものであるか、調べてみよう。(1)嗷嗷鬼母秋郊哭(春坊正字劍子歌)(2)願携漢戟招書鬼(綠章封事)(3)秋墳鬼唱鮑家詩(秋來)(4)鬼燈如漆點松花(南山田中行)(5)千歲石牀啼鬼工(羅浮山人與葛篇)(6)鬼雨灑空草(感調五首 其三)(7)海神山鬼來座中(神絃)(8)呼星召鬼歃杯盤(神絃)(9)耕人半作征人鬼(白虎行)(10)鬼哭復何益(漢唐姬飲酒歌) 右の句中に用いられている鬼の字を、その字義によつて分類してみると、大体次のようになる。

一、死者、またはその靈魂 (2)、(3)、(9)、(10)

二、死者に関連して起る現象 (4)、(6)

三、俗信上の神 (1)、(7)、(8)

四、精巧な技術の形容 (5)

右のうち、第二は第一に従属するものと見られるし、第四はいわゆる鬼詩とは関係がないように思われるので、結局李賀の用いた鬼字の表わすものは、第一と第三の二種類ということになる。

5 李賀の集中には、鬼と近縁関係にある魂、魄、魑、魅等の字が……しばしば現れる。雨冷香魂弔書客（秋來）、歸魂夢中語（傷心行）、我有迷魂招不得（致酒行）、宋玉無歸魂（自昌谷到洛後門）楚魂尋夢風颺然（巫山高）、能飢食人魂（公無出門）、且持感愁魂（綠水詞）、左魂右魄啼肌瘦（長平箭頭歌）、坐泛楚琴吟招魂（南園）、嬌魂從回風（感諷六首、其二）、撫舊惟銷魂（感諷六首、其六）、弄屬索人魄（漢唐姬飲酒歌）、君魂夜寂寂（漢唐姬飲酒歌）、龍帳着魑魅（昌谷詩）、百年老鴛成木魅（神絃曲）、山魃食時人森寒（神絃曲）

6 以上李賀自身の使用した鬼及び魂、魄、魑、魅等の字の意義を、更めて整理してみると……

一、死者、またはその靈魂——魂・魄・魄

二、俗信上の神——鬼

三、妖怪変化——魑・魅

四、生者の靈魂——魂

右の一、二は、潘德輿の挙げた例句の素材と一致するが、三、四はその中に見られなかった。ともあれ、以上四種の鬼は、いずれも普通の感覚では知覚することのできないもので、特殊の主観的狀態の下でのみ、その存在が認められるものである。従つてこの種の現象を想起する者は、或は恐怖、不安の念に襲われ、或は神祕觀を覚えるのが常である。世人が李賀の詩に感ずるもの

けたのも、その作中にそれらの要素が濃厚に存在してゐる。各詩句がそれらの要素を涵養してゐるに違ひない。

7 けれども、李賀の詩の鬼氣を形成しているものは、単にそれらの素材のみではないであらう。表現上における語の選択、或は修辭技巧等も亦鬼氣の形成に参与してゐることを見逃すわけにはゆかない。……潘德輿の挙げた……瘦馬秣敗草（秦義里滯雨）……これらの句を通覽して認め得ることは、いずれにも死を暗示し、或は連想させるような語の含まれてゐることである。

8 李賀の詩の現存するもの二二二首……一の首につき一字強の割合で「死」の字が現れ、二字強の割合で「老」の字が現れ、二字弱の割合で「愁（憂）」が現れ、三字弱の割合で「夜」の字が現れるわけである。……陰性な文字に対する李賀の好みは、色彩語においても同様であつたことが（荒井健）氏の精密な統計に本づく研究を通して知られるのである。

9 思ふに、かゝる用字癖というものは、作者の精神状態やその方向によつて形成されるものである。李賀が……暗い感じの文字を愛用したといふことは、彼の心が常に死を意識し、青年にしてすでに老者の憂愁を抱いてゐたことを示すものに外ならない。李賀の詩の多くは、そのような暗澹たる精神を母胎として生まれたものと見られる。用字用語の間に搖曳する鬼氣は、決して偶然の所産ではない。

10 南宋の陸游に、李賀の詩を評した次のような語がある。

箋詞如百家錦納、五色炫耀、光奪眼目、使人不敢熟視。

これは李賀の表現の華麗過ぎることを言つたものである。先に述べた暗い文字の愛用といふこと

と、一見矛盾しているようであるが、……現実の生活が暗ければ暗いほど、美しい幻想の世界を自ら作り出して、その中に不幸な魂を遊ばせるということには、あり得ることと思われる。幻想の世界は美しくなければならぬ。華麗な表現はその必要から生まれてくる。しかも、深刻な憂愁はおのずから流露せざるを得ない。それが明暗二様の文字を錯出せしめる結果となり、強烈な刺戟からくる不安な気分と、息づまるような重苦しさを読者に与えるのではあるまいか。

II 以上……を要約すると……李賀の鬼詩は

(一) 素材の上から見ると (1) 人の死、または死者の靈魂、(2) 俗信上の神等が中心であり、(3) 妖怪変化、(4) 生者の靈魂等も多少取り扱われていること。

(二) 表現の上から見ると (1) 死・老・愁等の暗い文字が多く使用されていること。(2) それが華麗な文字との対照によって一種の鬼氣を形成していること。

12 李賀の鬼詩を形成せしめた因子として考えられるものは

(一) 内的には 李賀自身の異常な性格

(二) 外的には (1) 窮困・疾病等の不幸な境遇、(2) 韓愈・盧仝・沈亞之等師友の感化、(3) 神話・伝説・志怪・伝奇等の影響、(4) 楚辭の影響、(5) 道教の影響等である。

なお、……仏教からも、何らの影響を受けなかったと言いつても切れないであろう。……怪奇な仏画が彼を刺戟するところも少くなかったはずである。また、完成の域に達した盛唐の詩に対して、如何にして変化を主み出すべきかと舌出した中唐詩人共通の課題も、李賀の瑰詭な詩を引き出すための原因になったと言えないことはない。

一八七六年四月二十四日に齋藤响博士から三月十五日付・日野局四月十九日消印の手紙がとどいた。『李翼研究』第十三号「二〇世紀の李翼(七)齋藤响(その二)」などに関する懇切な教示で、四百字原稿用紙十二枚の長文である。同日、電話で高情を謝し、許しを得たので、その全文を本第十四号に掲げ、その後につたしの返事を添付することにした。

拝啓 久しく御黒首に打過ぎ政權の段御容赦下さい。客臘 李翼研究第十三号御患贈にあずかり早速御禮申上ぐべきところ身邊多事にとり紛れ遅延したことをお詫び申上げ、改めて御禮申上げます。殊に拙著を仔細に精読頂き、御批正賜わったこと感謝に堪えません。李翼研究に一心に御精進のこと敬服の至りです。拙著の誤記誤植をそのままに放置したこと怠慢至極汗顔というほかありません。拙著唐詩上巻の際、誤植があまり甚しいので閉口したのですが、実は集英社では当時校正係が二名、しかも片手間、一人は出版課長、一人は囑託、他の仕事もやり乍らで、漢文校正は始めてという次第、小生も努力はしましたが筆舌は頭で読んでしまうので、なかなか直らなかつたのですが、私の指導しているグループのテキストに使用してから大分訂正されました。李翼にはその機会がなく、再版の時、目を通したのですが、精読が出来なかつたので、そのままになったわけです。これは甚だ苦しい遁辞に過ぎませんが、お蔭をもってこれから多少善くなる

かと思います。

拙著をスタンダードと目されていることは恐縮で、私は決してそんな考えはありませんでした。鈴木先生が歌詩集を出されると聞いたとき、ことによつたら摺筆しようかと思つたのです。ところが出版されたのを拜見して、まだ存任理由が残されていると思つて書き続けました。よりよき書物が出ることは覚悟、否、期待していました。拙著唐詩選上巻の巻末に記したように、私の少年時代、森槐南・久保天隨両先生の著書によつて多大の裨益を得ました。それが自分で注釈を出す段になると、誤謬が多いことを発見し、それも同じ古人の注解本を踏襲していることがわかりました。そこで確實な反証を挙げることに苦渋しました。学思は学思として、訂正することが後輩の責任であり研究に忠実だと考え、後に来るものが更に私の労作を訂正することを豫期する旨を示して置きました。

私は戦災のため蔵書を殆んど全部焼失しました。ただ僅少のものが残りました。全唐詩全唐文もその焼失の中でありましたが、その後まもなく全唐詩は買い求めました。全唐文は一寸手に入らず、そのままになり、關心が薄れ、尊元の御指摘によるごとく、賀の父親の事跡を等閑に付したという失策がありました。

さて私の知らない奥について御教示が欲しい。一、沈駙馬（拙著四一頁）が沈疇でなく沈鵬である根拠。二、戴叔倫の哀哀長吉の長吉のこと。詩意は怪しいが、李賀の入蜀と關係があるかどうか。三、私が拙著の書者王保定と書いたのは唐代十種によつたので俗本に誤まられたか。尊兄が王定保とされた根拠が知りたい。

次には愚見を述べて御批判を仰ぎたい。

元来、私は二つ以上の説があつて決め手がないときには旧説に従うことにしていますが、清朝の考證学一派では「こうではないか」「可能性」から「どうもこうらしい」「蓋然性」へ、そこから「こうに違いない」「必然性」へ、「こうだ」「言然性」となつてしまい、新しい説が流行する傾向がありました。そこで、

一、「隴西の李賀」のこと。新唐書の巻頭、本紀の最初に高祖李淵について「姓は李氏、隴西成紀の人也」と明記してあり、次の時代にも認められていたわけ。近來、唐の皇室は漢民族ではなく外夷の子孫という説が出て有力になっていきますが、嚴密なキメ手はないと思います。今、李賀がここにいと假定して、「言は隴西云々と称しているが、皇室は自称しているだけで、間違っているぞ」といったらどんな顔をするでしょうか。尤も唐の皇室が老子（李耳）の子孫などというのはお祝ひ言葉であつて当時でも事実的事実とは思つていなかったでしょう。

二、「宮娃歌」について当時唐の宮中に士分の妻を奪つて宮女とするようなことはなかった。謀反で死刑になつた家族の女性や宮中に没收して雑役に当てる例はあつたが、地位の低い階級の婢妾や賤民の妻が権勢家に奪われることはあつても、宮中では一定のルールがあつて、やたらに士分の妻を奪ぶようなことはなかった。

三、蔭補のこと（拙著李賀一二頁）小生の言葉が不足してましたが、蔭補（又は門蔭）は日本の辞書にあるような字義的なものではなく、特別な例外的措置であつて、列伝にも特記されることが多く、低い官につくことを蔭補とは云わない。科挙に通過及第したものが就職する官職が無試